



私の実家は稲・畑作農家で、畜産はここに来て初めての経験です。牛飼いは本当に難しく、大変だと思うことも多々あります。そんななか、農業が身近にあったので私が生徒に伝えられることは、食品を生産するということが非常に重要な仕事で、周りの同業者や消費者に対して責任が伴うということ。外部と接しても恥ずかしくないような生徒であってほしいです。(中澤 遼太先生)



私の出身は東京都で、酪農や畜産にはまったく縁がない環境で生活してきました。昔から自然豊かな場所で動物に関わる仕事がしたいと思っており、高校進学と同時に思いきって進学しました。岩見沢農業高校では、牛のほかには鶏、豚など他畜種もいますが、牛が一番世話のしがいがあり、牛の専攻に進みました。毎日が楽しく、充実しています。作業をするうえで重要なことは、自分で考えて行動することはもちろん大切なのですが、それ以上に人の話をしっかり理解して聞くことが重要だと思えます。また、実際に動物に関わってみて、私は群全体というよりは、動物の個体ごとに向き合って世話をすることが好きということに気がつくきました。(2年生、坂本 菜緒さん)

正解があったとしても教えない

牛舎での実習はとくに、先人達や全国の先輩酪農家が築きあげたノウハウが多く存在します。正解のやり方を教えてしまえば作業は早いのですが、せっかくの実習という機会、生徒達で考え話し合いながら答えに辿り着くことで学びが深まると思っています。



提供：北海道岩見沢農業高等学校（別日に撮影）

社会人としての自覚も

ここで搾った生乳は当然のごとく出荷されます。それは、食品として消費者の皆さんの口に入るとのこと。教員・生徒ともに決して粗末なものを出荷してはならないという自覚を持って取り組むよう心がけています。

酪農を通じて地域との繋がりを

岩見沢という地域は稲・畑作が充実しており、日本酒の酒蔵やワイナリーなども存在します。最近はそのような地域の他産業から廃棄されるものなどを譲り受け、エサとして給与する取り組みを行なっています。生徒の関心は高いです。



概要

北海道岩見沢農業高等学校 畜産実習(2年生)
 生徒数8名(取材日は交通機関のトラブルにより寮生以外の生徒は欠席)
 ホルスタイン19頭、ジャージー1頭、黒毛和種3頭(うち雌2頭)
 16床繋ぎ牛舎、ルーズバーン、キャリロボ、自動給飼機
 圃場面積14.4ha
 活動内容：牛舎の衛生維持をはじめとした牛舎作業全般を行なう。非農家出身の割合が多く、酪農が身近にない生徒の酪農畜産業界の入り口として教育を行なう。生徒は実践的な作業を通じて酪農や畜産業界の基礎を学ぶ。
 担当教諭：工藤 拓郎先生、中澤 遼太先生

酪農に憧れや興味を抱き、実践をとおして酪農を学ぶ学生達は今、何に興味を持ち、どのような活躍をしているのか？
 未来の酪農業界を担う期待の星を紹介！

NO.11

北海道岩見沢農業高等学校



酪農は憧れだけでは続かない一般家庭の生徒を受け入れることが多い本校では「動物が好き」や「牛が可愛い」というきっかけで酪農を目指す子が多いです。もちろんそれは素敵なことですが、それ以外にも、力仕事や生き物を相手にする大変さも併せて学んでもらいたいと思っています。酪農の良い部分も厳しい部分も知ったうえで、将来への選択肢にしてほしいと思っています。



私は教員になるまで畜産の経験がなく、新たに畜産を勉強しながらも携わっています。生徒達には多くを教えない、指示を少なくするようにしています。聞かれても「どうするのが良いと思う？」と答えを引き出すように心がけています。そこで生徒がどう考え行動するのかを楽しみながら見届けています。(工藤 拓郎先生)



私は埼玉県出身です。きっかけは動物が好きという気持ちからでした。畜産を学びたく、思いきって北海道まで来ました。はじめて牛と間近で接し、動物としての魅力と、酪農という産業としての魅力に引き込まれ、すっかりハマりました。よく見ると牛ごとに性格や表情が違うこと、エサや管理のやり方次第で食べ方や健康具合が変わるなど面白いことがたくさんあります。今は、アニマルウェルフェアを大切にしたい酪農経営に興味があり、先進的な取り組みを経験したく、海外の牧場で働きたいと思っています。(2年生、小林 葵々さん)

学生牛部は今!